

『カスピアン王子のつのぶえ』

—不信との戦い—

野呂有子

『ナルニア国年代記』を魅力あふれた作品群にしているものはなんであろうか。答えとして、すくなくとも次の三つがあげられよう。

- (1) 危機のさいにこちら側の世界の人間がナルニアの世界に呼ばれるという視座の逆転
- (2) こちらの世界とナルニアの世界では流れる時間の速さが異なっているという、時間の多様性
- (3) 昔話＝フェアリー・テールがそのまま真実の歴史として存在する世界への同化

これらの要素は、どれも『ナルニア国年代記』の読者にとってはおなじみのものばかりである。だが、作者C・S・ルイスは初めから大前提として、予備知識として、これらを読者にあたえるようなやり方はしない。『カスピアン王子のつのぶえ』においては、読者は登場人物とともに、いきなりナルニアの世界のまっただ中に投げ込まれ、登場人物とともに謎をひとつひとつ解明し、やがてこれらの原則をわがものとしていくことになる。すなわち、『カスピアン王子のつのぶえ』において初めて、これらの要素がじゅうぶんに展開され、登場人物と、そして読者にも認識されていくのである。

夏期休暇が終わり、寄宿学校に行くために乗り換え駅で列車を待っていたルーシィたち四人は、強い魔力の働きでとつぜんナルニアにひきもどされる。そして、自分たちが木々のおいしげる場所にいることに気づく。水と食料をもとめてあたりを探検するうちに、自分たちが島にいること、さらには、ケア・パラヴェルの城あとにいるらしいことなどが認識される。四人がナルニアからイギリスに帰ってから一年しかたっていないのに、城は荒れはて崩れ落ち、なん百年もうちすてられていたことは明らかである。四人は互いの知恵をふりしぼってこの謎を解こうとする。読者の視座は四人兄妹とほぼ同位にあり、まるで推理小説でも読むかのごとき緊張感と興味をもって、筋の展開を楽しむことができる。

宝蔵の出現により読者は一気にファンタジー世界にひきこまれていく。作者ルイスが宝蔵の宝について、「じゃり石かじゃがいもかなにかのように」積み重ねられ、長い年月のあいだに「厚くほこりをかぶっていたので、自分たちのいる場所がどこだかちゃんとわかっていて、品物のほとんどを覚えていなければ、これが宝だとは思ってもよらなかったことでしょう」と述べているのは意義深い。ルイスは子どもに理解しうる平明なことばづかいによって、正しい自己認識をもち、総合的な判断を下すものだけが、宝を宝として扱う

ことができると言っているのである。人生を価値あるものとするのに欠かせない人生哲学を、これほど平明に、ごく自然に語るができるのも、作者が子どもと同様の認識方法を忘れておらず、子どもの感性に訴えかけることばを身につけているからにほかならない。

かつてサンタ・クロースより送られた秘蔵の品じなを手にして、四人はここがケア・パラヴェルであることを確信し、ナルニア国の国王・女王としての自覚を新たにする。ナルニアにおいて国王・女王であるということは、完成された人格の持ち主であることをも意味する。宝蔵の入り口を前にしてためらうスーザンに、ピーターは「きみはここでは女王じゃないか」といって励ます。そして、宝蔵で愛用の剣を抜きはなつピーターを「たしかにまかしどおりの一の王」と弟妹は感じるのである。

わびしい朝食のあと、「知恵と判断力にすぐれた王」であるエドモンドが、時間の謎を解明する。興奮する四人の眼前でいっそう衝撃的な出来事がくり広げられる。小船にのった武装兵士が捕虜を溺死させて処刑しようとする。しかもその捕虜は小人であることがわかる。スーザンの果敢な行動により兵士は追いはられ、小人は助けられる。この作品において四人はここで初めて、ナルニア本来の住民と顔を合わせるわけである。小人の名はトランプキン。カスピアン王〔子〕の使命をうけて四人を迎えにくるとちゅう、敵にとらわれたのだった。小人のつった魚をごちそうに、四人はカスピアンについて、これまでのいきさつについて、トランプキンから話をきく。

ここまでの筋の展開は、いわば『カスピアン王子のつのぶえ』の導入部として位置づけられることになる。ケア・パラヴェルの城あとは、四人兄妹と、そして読者とが、ナルニア世界に同化していくためのこころの準備を整える舞台となっている。

そしてこのナルニア世界への同化を無理のないものとするためにルイスが採用しているのが漸層法——グラデーション——の手法である。一例をあげておこう。森を探検する四人はまず城あとにたどりつき、宝蔵を発見し、そして小人に出会う。ナルニア的要素をもつものとの出会いは、初めよりもあとに行くほど強烈になっていく。また、城あとと宝蔵が無生物であるのにたいし、小人は生きていて話をする存在でもある。このように、同化は漸層的に展開される。話のすじ道は内的必然性によって支配されているのである。

漸層法はナルニア世界への同化を無理のないものとしているだけではない。四人兄妹やカスピアン成長——認識領域が広がり深まる過程、と言いかえてもよい——を具体的に表現するうえでも、きわめて有効な働きをしている。自分たちのおかれた場にたいする四人の認識は、しげみのなか—島—ケア・パラヴェルというように、次第に特定化されていく。そして、空間認識が完了したあとに、より広い視座を必要とする、時間（＝時代）認識がなされている。このように、漸層法を使って、退行的なサタンの像を生成していることを指摘している（『〈失樂園〉研究序説』）。

カスピアン王子の生い立ちは昔話ふうな枠組みで語られる。「カスピアン王子はナルニアのまんなかの大きなお城に住んでおりました」という出だしの語り口は昔話に共通する語

り口である。読者は昔話を楽しむ感覚で物語のなかにひきこまれていく。

ミラース王の支配下にあつて、往時のナルニアの姿は住民にさえも忘れられたものとなっている。

「ものいうけものたち」、「ものいう木ぎ」、そしてアスランの存在を信じるものはごくわずかであり、

「そんなものはみな乳幼児むきのたわごとにしすぎない」とされている。征服民族であるテルマール人は木ぎやけものたちを「ものいわぬもの」にし、いいつたえを恐れて巨大な森をしげらせた。ケア・パラヴェルの城はうちすてられ、ばけものすみかであると信じられていた。こうしたなかにあつて、カスピアン王子は、征服者の子孫でありながらも、往時のナルニアにあこがれを抱き続ける。両親のいない王子は、幼少期を乳母に、少年期をコルネリウス博士に養育される。乳母と博士は王子のなかに眠っていたナルニア的なものを目覚めさせ、芽吹かせる役割を果たす。ミラース王のあとつぎ誕生とともに、身の危険を察知した王子は城を脱出する。森で落馬した失神した王子は「ものいうアナグマ」、松露とり、小人のトランプキンとニカブリクに助けられる。松露とりたちの手引きで生き残りの小人やけものたち、セントールたちとの出会い、力を合わせてミラース王と戦う。本来のナルニアを回復するためである。しかし、敵に追いつめられ、魔法のつのだえをふいて助けを求める。四人兄妹はこの笛の魔力によってナルニアに呼びよせられたことが、ここにいたってようやく明らかにされる。

作者自身が前もってことわっているように、カスピアン王子についての語り口は、第一章から第三章よりなる導入部の語り口とは別個の、独立した枠組をもっている。導入部の語り口は、四人兄妹を中心にすえたものであった。そして、読者の視座は、四人とほぼ同位にあり、推理小説を読むかのごとき興味を持って話の展開を楽しんできたのであった。ただひとつ四人との違いは、読者が「カスピアン王子」（原題）という題名をあらかじめあたえられていた、という点である。したがって、謎解きに参加しながらも、読者の頭のかたすみには、いつ、どういう形でカスピアン王子が登場するか、という期待があつたはずである。

推理小説ふうの文体から昔話ふうの文体へ、という語り口の転換は、読者の期待感にじゅうぶん応えうる構造をこの作品にあたえている。読みながら誰でも、しげみを抜け出して広びろとした海に出たときのような解放感と、宝物のほこりを払いその輝きに見入るルーシィが感じたのと同じなつかしさを感じるのではないだろうか。

汚染され蹂躪されたナルニアにあつても、カスピアン王子はいたいけで無邪気で、本来のナルニアにふさわしい資質を備えた姿をして描かれている。本来のナルニアを希求する王子自身のなかに、ナルニア本来の美が光り輝いているのである。王子を養育した乳母と博士には、じつは小人族の血が流れていた、カスピアン王子のなかに眠っていたナルニア的なものが覚醒していく過程にも、やはり漸層法が使われている、いくつか例にあげておこう。

第一に、王子に働きかけをする人物は、乳母—コルネリウス博士—ものいうアナグマと小人たち、となっている。王子は本来のナルニアについて、まず乳母から話をきくが、それは「たあいもない昔話」であるとしてかたづけられている。だが、それがまぎれもない史実であったことをコルネリウス博士から学ぶ。そして、ついにトランプキンたちに出会い、自分自身の体験によって、それが現実のものであることを認識する。カスピアン王子にとってはじめ「昔話」であった本来のナルニアは、「史実」となり「現実」となる。また、乳母は自分と同じテルマール人だと無意識に認識していたしていたカスピアンであるが、博士は自分が混血小人であること、すなわち半分は本来のナルニア的要素の持ち主であることを明かす。ものいうアナグマや小人にいたってはまぎれもなきナルニアの先住民である。

第二点として、「カスピアン王子についてのトランプキンの話」を構成する第四章から第七章までには、カスピアン王子が眠りから目覚める場面が五回でてくる。一度目と二度目はコルネリウス博士にゆり起こされる。最初は二人で尖塔に上り、そこで王子は乳母からきかされた話が「昔話」などではなく史実であること、そして博士が混血小人であることを知る。二度目に起こされたのは、王子の身に危険が迫っているときである。ここで王子は、自分こそがナルニアの真実の王位継承者であること、おじのミラースが王位略奪者であることを知る、博士に初めて「陛下」と呼ばれたカスピアンは、自分が王となるべき人物であることを自覚する。三度目には落馬した王子が正気にもどり、自分を介抱しているのが、ものいうアナグマであることを発見する場面が描かれる。この三度目の目覚めはナルニアの先住民のかくれ家を舞台にしている。そして、王子から話をきいたアナグマは、すぐさま「ナルニアの真実の王」 t p カスピアンを呼び忠誠を誓う。四度目の目覚めは森の踊り場を舞台に描かれる。カスピアンが「これまで心をこらして思いつめていたような」フォーンたちの踊る姿が眼前に展開される。カスピアンは喜びとともに踊りの輪に加わるのだった。踊りは万物共通の言語だといわれる。この場面では、本来のナルニアにおいて国王であるとは、どういうことなのかが如実に描かれているといえよう。そしてさいごに、踊りつかれて眠ったカスピアンが目覚めると、フォーンのわれたひづめのあとが残っていて、前夜のことが夢ではなかったことがわかる。

このように作者は、「眠りから覚醒へ」というモチーフを漸層的にくり返すことによって、カスピアンがナルニア国王としての自覚を深めていく過程、そして先住民がカスピアンを王として認めていく課程をよどみなく語っているのである。

第四章から第七章について二点付け加えておきたいことがある。ひとつは、カスピアンの呼称である。地の文（ルイスの語りの部分）において、カスピアンはときには「王」、ときには「王子」と呼ばれ、呼称がなかなか定まらない。これは、征服民族と先住民族が拮抗するナルニアにおいて、カスピアンの地位が不安定なものであることを象徴する。さらに、次第に「王さまらしく」成長していくカスピアンであるが、まだまだ成長が未完のものであることをも象徴するといえよう。つまり、呼称の不統一は王としてのカスピアンの立場が

内的にも外的にも不安定（＝成長の途上）であることを示しているのである。

第二点として、先住民族を構成するいきものたちについて手短にふれておこう。かれらは大別して次の三種類からなる。

- （1）三びきの茶色のクマ、地ひびき森の七人の小人など、子どもたちになじみ深い昔話の登場人物を連想させるもの
- （2）松露とり、リーピ・チープなど作者が独自に創り出したもの
- （3）セントール、フォーンなどギリシャ神話に登場するもの

右の分類は大まかなものにすぎない。いうまでもないことだが、じっさいにはすべてのいきものがルイスの筆によって独特の味わいをもつ存在となっている。だが、ナルニア的世界を形づくるものの原型をおさえておくことは、作品をより深く鑑賞する上で必要なことといえよう。

トランプキンのお話をきいた四人兄妹は使命を自覚する。スーザンがなくしたつるぶえが何百年もの時を経たあとに、コルネリウス博士の手に渡り、カスピアンに贈られ、そしていま四人をナルニアの地に再び呼びもどしたのだった。はめ絵の断片がすべてあるべきところに収まり、一幅の絵を構成するかのごとくに、今までのナルニアでの出来事が、整然としたイメージとなって子どもたちに認識される。時間の謎を解いたときに、「古代ブリトン人かなにかが現代のイギリスにたちもどったにたいだ」と感じた子どもたちだったが、こんどは「アラビアン・ナイトで魔法使いに呼び出される霊神ジンみたいだ」と自分たちを認識する。四人兄妹の体験は、「古代の人びとが現代に出現したらどんな気持がするだろうか」とか、「霊神ジンは呼ばれたときどんな気持でやってくるのだろうか」という子どもの素朴な疑問にたいする平明な答えにもなっているのである。こうした視座の逆転が、作品に活力と新鮮味をあたえている。

使命を自覚した子どもたちは、ただちに小人とともに出発しようとする。しかし、小人は四人を見て戦力にはならないと判断するもともとトランプキンはアスランの存在を信じていたわけではない。ピーター王たちの治世についても「あんな昔話」と言っている。使者としてやってきたのもカスピアンにたいする忠誠心のゆえだった。四人はまず自分たちに対する小人の〈不信〉と戦わなくてはならなかった。

宝蔵で武具をつけて「身も心もいっそうナルニア人らしくなった」エドマンドは、騎士らしく剣術の練習試合を申しこみ、トランプキンを打ち負かす。次に小人はスーザンと弓の射くらべをして負ける。最後にルーシィに傷を治してもらい、自分の非を悟る。腕比べは、相手を倒す剣術から、共通の的に向かう弓術へと移行する。そして、最後は、癒すものと癒されるものという関係に集約される。ここでは漸層法が、対立から和解の方向に向かっ

ているのである。

島を抜け出し本土に上陸した一行は疲れはてて眠ってしまうが、ルーシィだけは寝つけない。小鳥のさえずりにうながされるようにして木ぎに話しかけ目覚めさせようとするが、もう一步というところで不首尾に終わる。

森のなかで道に迷いかけながら、一行は絶壁のふちまでやってくる。ただひとり、ルーシィだけがアスランの姿を認め、その意向を直感的に理解するが、そのためにつらい立場にたたされる。ピーターもスーザンもアスランを見ることができず、ルーシィを信ずることができない。アスランの存在を頭から信じないトランプキンは暴言をはいてルーシィを激怒させる。しかし、エドモンドは違っていた。

「ぼくたちがナルニアを初めて見つけたとき……最初に見つけたのはルーシィだった。けどもだれもルーシィのことは信じなかったよね。なかでもぼくは最悪だった。そして、けっきょくルーシィは正しかったんだ。こんどもルーシィを信じるのが公正というもんじゃないかな。」

エドモンドのことばは同じ轍を二度と踏むまいとするものの決意のほどがうかがえる。かつてのエドモンドを知る読者にとっては感動的できえある。さらにこのエドモンドのことばは、『カスピアン王子のつづえ』の枠組のなかでは、かくれ家での王子のことば、

「わたくしはアスランがいると信じます。たとえ前には信じていなかったとしたって、今なら信じましょう。人間たちのところに話をもどせば、アスランのことを笑い飛ばすようなひとびとは、ものいうけものや小人のことだって笑い飛ばしたことでしょ。ときには、このわたくしできえも、アスランのようなかたはほんとうはいないのかもしれないと思うことがありました。そしてまた、あなたがたのような人びともほんとうはいないのかもしれないと思うときもありました。ところが、ちゃんと、ほら、ここにいるじゃありませんか。」

と響き合うものでもあって、対をなしていると言ってもよからう。ここには、迷いつつも、眞実を希求して、おのれの道を進み続ける者の姿が描かれている。

一の王、ピーターは一人一人に意見を聞くが、トランプキンの答えは豊かな経験をもつてしても絶対者の存在を信じない被造物の判断には限界があることを示している。スーザンの場合にはなお悪い。初めから森を嫌い、そこから抜け出すことばかりの望んでいる点では、スーザンは征服民族テルマール人と変わらない。そればかりか、疲労を理由に真剣に考えることを拒否している。自分の感情に左右され、力の限り努力することを嫌うもののゆきつくところは破滅でしかない。一同は森を出ると、とたんに敵の攻撃を受け、もときた道にもどっていく。

その夜、アスランに呼ばれてルーシィが目覚めると木々も目覚めて踊り始めた。アスランとの再会は「ものいう木ぎ」との再会でもあった。アスランに凝視されて、ルーシィは自分の非を悟る。たったひとりでもアスランにつき従っていくことこそ、ルーシィのとるべき道であった。ルーシィに厳しい試練があたえられる。兄妹たちを起こして、アスランのところへ連れてこなければならぬ。しかも、ほかのものにはアスランの姿は見えないかもしれないという。一見、過酷なこの仕事は、じつはアスランの深い愛の業から出たものである。アスランは「いまやそなたはライオンなのだ」といってルーシィを励ます。これはナルニア国物語の枠組みにおいては最高のほめことばである。このときのルーシィは、この上なくアスランに近い存在として認められている。

ルーシィがアスランのたてがみに手をおいて進むとき、木ぎは左右にわかれて二人を通し、つかのま、「完全に」人の姿をとる。アスランと「イヴの娘」、ルーシィとの関係の回復は、「ものいう木ぎ」と人との関係の回復であり、それはまた、ナルニアの回復でもある。すべてのことの成就がここに集約的に象徴されている。

ルーシィが「わたし、ひとりだけでも行かなくてはいけないの」と、並みならぬ決意を見せたとき、スーザンは、少数派であるとか、最年少であるとかのたてに威嚇する。さらには、ルーシィのことばを逆手にとって強弁しようとする。ルーシィがくちびるをかみしめ、スーザンにいつてやりたいことをいわないようにと努力しながら、先頭にたって歩き続ける。そして、アスランにじっと目をそそいでいるうちに、いつてやりたかったことなどみな忘れてしまう。われわれは、ここにもまたひとり、不信にとりかこまれながらも、真実をひたすら希求するものの姿を見るのである。

アスランからねぎらいのことばと使命をうけたピーターら三人がアスラン塚に入っていくと、黒小人のニカブリクが不審な仲間を二人従えて、敗戦責任がカスピアンにあると追及しているところだった。つるぶえの魔力が働かなかつたと即断したニカブリクは、黒魔術によってあの「白い魔女」を呼び出すことを提案する。ナルニアを百年支配した魔女には、アスランやピーター王などよりもはるかに現実的な「力」があるという。アスランを信じないだけでなく、カスピアンをないがしろにして、自分たち黒小人族だけの繁栄を望むニカブリクの論理は悪魔的である。

つれの正体を見破られ、ニカブリクら三人はカスピアンたちにとびかかる。そこへ、ピーターたちがとびこんで加勢し、ニカブリクたちは殺される。

ピーターはミラーズに決闘を申し入れる。ミラーズは初め拒否するつもりであったのが、部下のグローゼルらの計略にはまり、挑戦状を受理する。部下とミラーズが結んでいるのは〈信頼〉ではなく、〈利益〉だった。利害が対立すれば関係は崩れていく。ミラーズはまず部下に裏切られて、破滅への道を踏み出す。

決闘の場には、アスランの咆哮によって目覚めた木ぎたちもやってきて立会う。決闘が

始まると、ピーターの形成は次第に不利となっていく。小休止に入ったピーターのことばには死の覚悟がうかがえる。ピーターは一の王として、アスランに依存せず、「全力をつくして」敵と戦わなければならない。

とつぜん、ミラースは草むらに足をとられてうつぶせに倒れる。ピーターは騎士道にのっとり後へさがって待つが、ミラースは起き上がらない。機に乗じてグローゼルらは味方の兵に、偽りの情報を流して武器をとらせる。そして、どさくさにまぎれて、倒れているミラースを背後から刺し殺す。全面戦争が始まり、カスピアン軍は善戦する。「ものいう木ぎ」が潮のごとくおしよせると、テルマール軍は恐怖のために戦意を喪失して、みずから敗走する。

ルイスは〈不信〉との戦いを三段階にわけて漸層的に描いてみせる。〈不信〉は、自己の内面の敵——味方のなかの不満分子——ミラースとその軍勢、と三回姿をかえて主人公たちの前に立ちはだかる。いずれも手強く容易には倒せない。しかし、これらの敵が倒されるとともにナルニアの回復も進んでいく。ルーシィを中心として〈内面に巣くう不信〉が克服されたとき、アスランはナルニア全土に響き渡る咆哮によって木ぎたちを眠りから覚醒した。カスピアンやピーターが苦しい戦いを戦っているときに、アスランはスーザンとルーシィを従えて、くさを断ち切り川の神を解放する。さらに、偽りに満ちた「歴史」の授業から子どもたちを解放し、追放されていたカスピアンの乳母を病から解き放つ。そして、乳母とカスピアンが再会したとき、ナルニアの回復は完成する。

〈悪〉のゆきつく先はどう描かれていたのだろうか。ミラースは、臆病ものと思われたくないばかりに部下の計略にはまり、自分でころび、背後から部下に刺殺される。グローゼルらはミラースの心の内面に巣くう〈傲慢〉の象徴にもなっている。ここには悪は自滅するというルイスの主張が明示されている。

ミラースとピーターの決闘は、ナルニアの虚偽の国王と真実も国王の対決でもある。カスピアンはピーターの姿から、真実の国王とはどうあるべきかを学んでいく。すなわち、アスランを信じつつも、アスランに依存せず、力の限りをつくして事に臨むということ。『カスピアン王子のつのはえ』におけるピーターは、国王としての範例となっている。

アスランによってよみがえったナルニアには、バッカスやシレナスを中心に陽気な踊りの渦が広がっていく。テルマール人のなかには、逃げ出さずに、踊りに輪に加わるものも出てくる。

ピーターに先導されたカスピアンは、ここで初めてアスランと顔を合わせる。あれほどにあこがれ、信じ続けたアスランに。

……カスピアンはひざまづき、ライオンの前足に口づけしました。

「ようこそ、王子よ」アスランがいました。「そなた自分がナルニアの王位を継ぐにふさわしき人物だと思うか。」

「おそれながら、自分ではとてもそうは思えません」とカスピアンは答えました。

「わたくしはまだ子どもです」

「それでいい」とアスラン。「われこそふさわしき人物なりなどと思いがっていたら、それこそふさわしくないあかしとなっていたら。それでこそ、そなたを、われわれと一の王との立会たちあひのもとで、ナルニア国王として承認いたそう」

こうして、カスピアンは名実ともにナルニア国王として認められる。すでに指摘したように、ナルニアにおいて国王であるということは完成された人格のもち主であることを意味する。そしてその具体的な内容は右記のアスランとカスピアンのやりとりに明示されている。すなわち、謙虚であること。そして謙虚さにもとづいた正しき自己認識、これこそ、ナルニア国王として必要不可欠の資質ある。われわれは虚偽こゝろごころの国王ミラーズが傲慢のかたまりとして描かれていたことを忘れてはならない。傲慢は謙虚さの対極にあり、わが身を滅ぼすもとでもあった。

『カスピアン王子のつのおえ』の主題は、〈不信〉との戦いを通してアスランとの関係を回復することである。四人兄妹は自分が王位につくためではなく、カスピアン王子を救って王位につけるために、さまざまな〈不信〉と戦っていく。そして、カスピアン王子はさまざまな〈不信〉に包囲され、攻撃されながらも、ひたすらアスランを信じて、ナルニア解放への道を歩み続ける。

おさない子どもでありながら、ひたすら真実まことを希求して歩を運ぶカスピアン王子のなかに、われわれはひとつの範例を見る。われわれ自身の中にも、〈カスピアン王子〉は息づいているのではないだろうか。だが、かれはまだおさない。われわれは、このおさない〈カスピアン王子〉をいつくしみ、はぐくんでやらなくてはならない。そして、こうした行為を積み重ねることによってこそ、混迷した現代の危機的状況を切り開いてゆけるのではないだろうか。〈カスピアン王子〉は、われわれのゆくてを照らす一条の光となっている。